



Consideration

# 授業でしかできないことを しているか 評価は何のためなのか

生徒にどんな力を育むかという視点で授業を改善していくとき、学習評価と一体的に考えていくことが必要です。平成31年1月21日、新学習指導要領に対応した「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」が公表されました。これを取りまとめた中央教育審議会のワーキンググループにおいて、主査を務めた市川伸一先生に、学習評価から考える授業の在り方について伺いました。

単語で答えられる問いは  
社会には存在しない

なぜ「授業」というものがあるのでしょうか。知識を得るだけなら、書物やインターネットがあればできます。しかし、一人での学びの限界があるから、それを超えるために学校があり、授業があるはずです。生徒と教師が「時間」と「空間」を共有する授業でしかできない、有意義な学びができて

いるか。そこに、授業改善の方向性があるように思います。

私は心理学の研究者ですが、これまで全国各地の小・中・高校の授業実践に関わってきました。30年前、地域の子どもたちに対して心理学を活用した「学習相談室」を始めたことがきっかけです。この実践から見えてきた子どもたちの学習の悩みから、学校の授業にも課題感を持ち、教師が基本的なことを教えたいという問題

解決や討論を行う、「教えて考えさせる授業」という授業法を提案するようになりました。現在は年間50件以上の学校の教員研修や講習に参加させていただき、現場の先生方と一緒に授業づくりに取り組んでいます。

こうして多くの授業を見てきたなかで最ももどかしく思うのが、生徒に求める発言が「センテンス」ではなく「単語」である授業です。先生が説明したことについて「これを何と言います

東京大学 名誉教授／  
帝京大学中学校・高校 校長補佐  
市川伸一

いちかわ・しんいち ●1977年東京大学文学部心理学専修課程卒業、文学博士。中央教育審議会教育課程部会委員、学習支援研究機構理事長。著書・編著書に『勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス』（岩波ジュニア新書）、『授業からの学校改革—「教えて考えさせる授業」による主体的・対話的で深い習得』（図書文化社）など多数。





か？」と問いかけ、生徒は「日米和親条約」「質量保存の法則」などと単語で答える…。社会では、このように単語を求められる問いがあるでしょうか。あるとすればクイズぐらいです。

社会ではむしろ、物事の意味や意義などを自分の言葉で表現することのほうが重要です。それなら授業での問いも変えていく必要があるように思います。

教育とは元来、教科特有の知識や技能とともに、それを通じて学び方や人との関わり、問題解決や新しいものを生み出す方法など、社会で生きる力の育成が期待されるものです。近年の学校教育法や学習指導要領でも、改めて重視されています。その目的を置き去りにし、授業の形だけ変えることに意味はないと、アクティブ・ラーニングのブームが落ち着いた今、多くの先生方は気づいていると思います。社会で役立つどんな資質・能力を育てたいか。そのためにどのような授業を行うか。そこが授業改善の出発点になるのではないのでしょうか。

### 評価される側の声を聞き姿を見つめていく

では、学習評価は何のためにあるのか。平成28年12月の中央教育審議会答申、平成29年3月の学習指導要領

の改訂を受けて中央教育審議会の中に設置され、私が主査を務めた「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」では、まさにこの問いに立ち返って議論されました。

その際、各方面からの意見聴取やパブリックコメントも幅広く参考にしました。なかでも有意義だったのが、高校生や大学生、新社会人をお呼びして、評価される側の意見を聞いたことです。通知表の数字で示されるだけで、なぜ「3」なのか、何がよくて何が不足なのかはわからない。だから、改善のしようがない。彼らからはそんな不満も聞かれ、もっともな意見だと思いました。

これがスポーツだったらどうでしょうか。練習中、コーチは選手に対して「今のやり方は良かったよ」「もっとこうしてみたらどうか」などとアドバイスします。さらに、大会や試合でタイムや勝敗が出たら、なぜその結果になったかを選択とコーチで振り返り、日常的な練習を改善していきます。

教科の学習についても同じことが言えそうです。学期に一度、数字の評価

を行うだけでなく、小テストや定期テスト、課題レポートの返却などの機会に、どうすればもっと良くなるかの検討は重要です。例えば、テストを返却した際に自己分析と改善策をシートに書くよう指導し、今後に生かす教訓を引き出す支援をするといった方法もあるでしょう。こうして学習プロセスに着目し、インフォーマルでもいいから評価を行っていくことで、生徒の力をもっと伸ばすことができると考えています。

また、生徒の学習プロセスを見つめることは、教師にとっては授業改善のための情報を得ることもあります。例えば、学んだ知識について生徒同士が説明し合うペアワークを取り入れると、その様子を観察することで、生徒の理解度や躓きポイントがわかり、このまま進めていいのか、再度説明が必要かが見えてくるはずです。また、授業の最後に、生徒に「今日の授業でわかったこと・まだよくわからないこと」を記入してもらおうと、次の授業改善のヒントが得られるでしょう。

このように、学習評価とは、通知

## 学校で、クラスで、先生から学び仲間とも学ぶ意味は何か

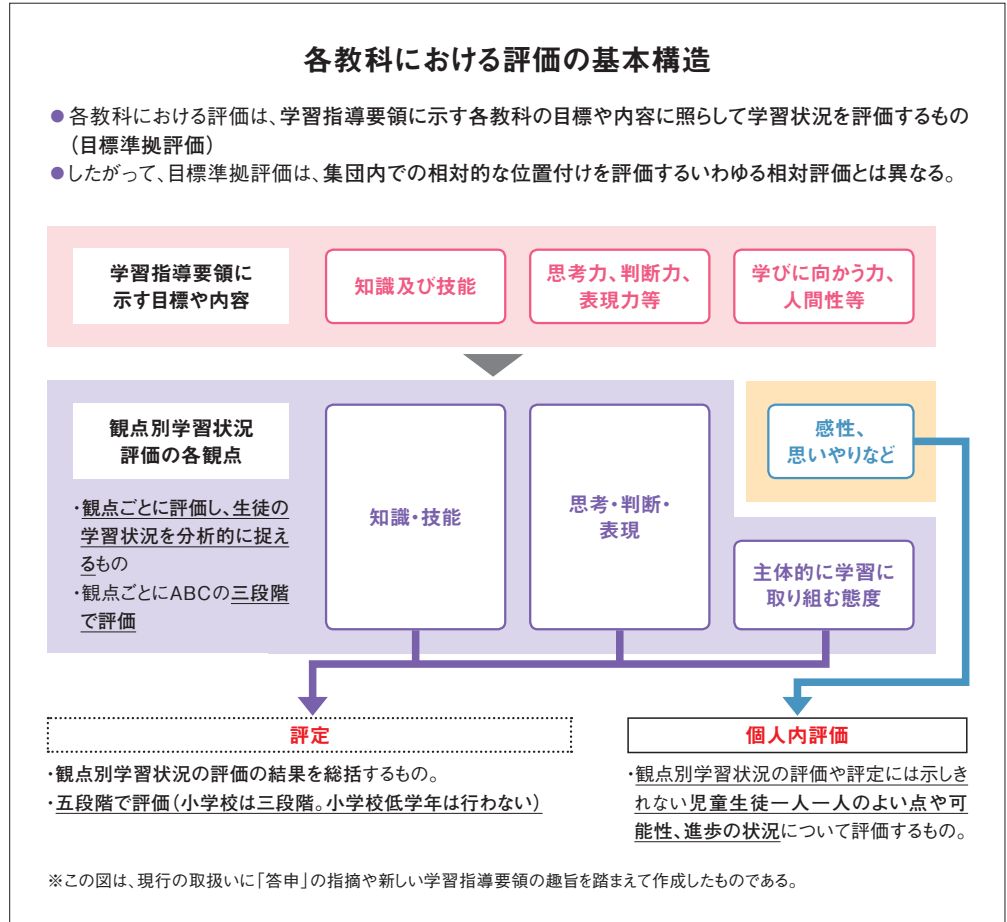
図1 「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」で示された学習評価の基本

- ①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ②教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと





図2 学習指導要領に示す目標と評価の関係



「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」に掲載の図を基に編集部で作成

## どんな生徒像を描いているか 授業はその先の姿につながっているか

化は、観点別評価が「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点から、新学習指導要領における資質・能力の三つの柱に対応する「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点となったことです。

そして、高校にもこの観点別評価を導入することになりました。小学校から高校まで一貫して資質・能力の育成を重視するという強い姿勢の現れといえます。ペーパーテストのみに頼って評価してきた高校では、評価方法の見直しは避けて通れないでしょう。では、3観点でどのように評価すればよいのでしょうか。「知識・技能」を評価するには、ペーパーテストもその材料になるのですが、事実に知識の習得を問う問題だけでなく、文章で説明を求めるような知識の概念的

理解を問う問題も大切です。「思考・判断・表現」は、評価の材料として論述やレポート、作品などが考えられます。既にこうした活動を授業に取り入れている先生は多いでしょうが、評価にも組み入れていく必要

があります。

そして、最も難しいのは「主体的に学習に取り組む態度」です。誤解されやすいのですが、これは挙手の回数やノートの取り方などのことを指すものではありません。「報告」では、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自ら学習を調整しようとする側面」で説明されています。

「学習の自己調整」というと難しく聞こえますが、「自分で学習のPDCAを回すこと」と言い換えるとわかりやすいかもしれません。計画を立て、実行し、評価、改善していくというサイクルを自分で進める。これは、社会で生きる重要な資質・能力の一つです。単に何時間勉強したかではなく、どういう工夫をして改善しようとしているかに注目し、評価していくとよいのではないのでしょうか。

また、観点別評価全体において、年度や単元、課題の冒頭に、これによって身に付けてほしい力や態度を明確にし、生徒に説明することも重要です。生徒は各自で活動を意味づけを取り組むことができ、授業の効果も高ま

表に数字を付けることとイコールではなく、生徒にとっては学習改善、教師にとっては授業改善に生かすことこそ本来の役割なのです。中教審のワーキンググループでは、その基本を強く意識しながら議論し、「児童生徒の学習

### 学習の自己調整とは 生徒が自分でPDCAを回すこと

評価の在り方について(報告)」をとりまとめました。

今回、指導要録上の最も大きな変



ると期待されます。

### 教師個人ではなく 学校全体での授業改善へ

観点別評価の導入に、高校現場では戸惑いもあるかもしれません。しかし、これを、どういう生徒像を目指すのかについて、改めて学校全体で考えるきっかけにしてほしいと思います。こういう大人になってほしいという、先々の成長まで見通しているか。そんな視点で、授業と評価を見つめ直してみてください。黙々とノートを取り、ひたすら問題集に向かう生徒とは違う姿が見えてこないでしょうか。

具体的に授業と評価を変えていくにあたっては、先生一人ではハードルが高いと感じる場合もあるかもしれません。特に高校は教科の専門性が高く、日常的に他教科の授業に踏み込む機会は少ないと思いますが、教科を超えて先生方がみんなで授業を良いものにしていくことも可能ですし、非常に有効な方法です。

例えば、私は学校の教員研修で、こんなワークショップ型の授業検討会を行うことがあります。簡単に言うと、参加する先生方に3色の付箋を渡して、見学した検討対象の授業について、①工夫されてよいと思った点、②改善点と代替案、③自身の教科で

も応用できそうな点を各色にメモ書きしてもらい、それを使って5〜6人のグループに分かれて意見交換するという方法です。

ポイントは、③のメモを通じて、自身の授業に置き換えてみる。教科や学年、小中高の校種の違いがあっても、それぞれの先生方が自分の授業で活かせるヒントは必ずあるはず。実際にやってみると、どの先生が何の教科かわからないぐらい活発に意見が出され、大変盛り上がりします。

それはやはり、先生方の根っこに目指す生徒像があり、コンテンツは違ってもお互いの授業から学ぶものがあるからでしょう。授業検討会の後、職員室で授業について話題にすることが増えたという報告も、数多く聞かれます。授業が変わることで子どもが変わり、教師自身が変わり、学校全体のカルチャーが変わっていく。各校がそうした好循環に向けて、第一歩を踏み出すことを願っています。

最後に、私事になりますが、学校現場に入りたいという希望が叶い、今年の春から私立中高一貫校に校長補佐

として勤め始めました。職員室では中高の先生方と机を並べています。LHRの時間を使って心理学を取り入れた学習法講座を始め、生徒とのコミュニケーションもだいぶ深まってきました。自ら願った職に喜びを感じながら、現場の先生方と一緒に授業について考え、生徒の成長に向き合っていきたいと思っているところです。

## 教科も、学年も超えて 自分の授業に活かせる点を見つけれられるか



『2019年改訂 速解 新指導要録と「資質・能力」を育む評価』(ぎょうせい)では「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」の内容に基づき、新しい学習評価の方向性や各観点の評価ポイントなどが解説されている。